

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 2 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520730

研究課題名(和文)近代日英米における出版・読書文化の大衆化の比較研究

研究課題名(英文)A Comparative Historical Study of Print and Reading Cultures in Japan, the UK, and the US in the Early 20th Century

研究代表者

前島 志保(MAESHIMA, Shiho)

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号：10535173

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：戦間期(1910年代後半～1930年代)日本の出版・読書文化の大衆化現象を20世紀前半に世界各地で見られた同種の現象の一例ととらえ、英米の事例と日本の事例の調査および比較出版史的検討を行った。これにより、当該の時期において編集手法、営業手法、読書規範については各地域でほぼ同様の変化が見られるものの、視覚表象の用い方、レイアウト、および実際の読書形態と性差の関りについては、おそらく前の時代の状況を反映して、日本の事例は英米の事例と大きく異なる傾向を示していたことが明らかになった。こうした研究成果は英文による共著として出版された。また、日本でも単著の一部に収められ刊行される予定である。

研究成果の概要(英文)：This comparative study examined the democratization and popularization of print and reading culture in interwar Japan in conjunction with its UK and US counterparts in the early 20th century. Investigations and analysis revealed that similar changes in editing and marketing styles as well as in reading norms could be observed in these three countries, which suggests such democratic shifts in print and reading culture can be said to have been a world-wide phenomenon in the early 20th century. At the same time, significant differences are evident in the periodicals published in the three countries during that time in terms of their use of visuals, layout, actual reading habits, and their intersections with gender, from which one can infer historical continuity in such practices from the previous century in each area. The findings of this study have already been published as chapters of books in English and will also be included as part of a forthcoming book in Japanese.

研究分野：史学一般、人文学、比較文学、比較文化 (近代日本の出版・読書文化の比較出版史的研究)

キーワード：日本 英国 米国 出版史 読書文化 比較文化 メディア ジェンダー

## 1. 研究開始当初の背景

大衆的な婦人雑誌は従来の近代日本出版史では周縁的な扱いを受けてきていた。これに対し、申請者は戦間期日本における出版の大衆化現象に関する調査・考察を行い、大衆的婦人雑誌が実はこの時期の日本の出版・読書文化の大衆化の中心であったことを、当時の日本の主な定期刊行物の編集・営業手法、出版読書文化に関する言説、および統計資料の分析を行うことで具体的に明らかにした。

ここで世界に視野を広げてみると、こうした大衆向けの編集・営業手法への転換は19世紀末から20世紀初めにかけて世界各地で見られることが先行研究からうかがわれる。ところが、これまでは近代における出版の大衆化現象については各国単位で研究が進められてきており、国や文化圏を超えて比較考察し、それぞれの特質を明らかにする研究はほとんどなされてきていなかった。例外的に、林香里氏による米独日の新聞ジャーナリズムの比較研究があり、また、英米での new journalism の相互関連性については或る程度研究がなされてきてはいるが、新聞と雑誌の両方を視野に入れて日本とその他の地域の出版・読書文化の大衆化現象の特色を再考察することは、行われていない。

このような状況を鑑み、本研究では、比較出版史に向けた第一歩とすべく、戦間期日本の出版・読書文化の大衆化現象をこれと関りの深い英国および米国における19世紀末から20世紀前半の同様の現象と比較考察することにした。

## 2. 研究の目的

上記のような比較出版史的考察を行うにあたり、以下のような事柄について明らかにすることを目的に据えた。

- (1) 19世紀末から20世紀前半にかけての日本および英米各国の大衆向け定期刊行物の編集・営業手法の推移とその特色を明らかにする。

- (2) 当該時期の日本および英米各国の出版の大衆化現象における読書規範と実際の読書行為の推移とその特色を明らかにする。また、上記の二つの目的のそれぞれについて、以下の点に注目しつつ、比較検討を行うことにした。

### 直接的な関連性の立証と意義の検討

前述したように、英米間の出版文化の直接的な関係性については既にかんりの研究がすすんでいる。そこで、本研究ではこれらの成果を踏まえて、日本の例はこれら英米の例とどのように具体的に関係しあっていたのかという点に特に注目して調査・考察する。

類似点・相違点およびその意義の対比検討  
直接的な関与が認められない(もしくは資料により関連性が明確には立証できない)ものの類似する現象が見られる場合、その現象の現れ方の異同とその意義を対比考察する。

さらに、時間的余裕がある場合は、当該時期の日英米の定期刊行物に描かれた「近代的な日常生活」に関する言説・表象について比較考察を行うことも、補足的目標とした。

## 3. 研究の方法

予備調査、日本・米国・英国での調査・考察を順次行った。

- (1) 予備調査(平成24年度)

当該時期の日英米それぞれの出版文化に関して日本語・英語で著された先行研究にあたり、各国における出版・読書文化の大衆化現象の類似点・相違点を洗い出し、今後資料調査すべき点を整理した。

- (2) 日本での調査(平成24-26年度)

国立国会図書館、日本近代文学館、お茶の水図書館、東京大学大学院政治学研究科附属近代日本法政史料センター(明治新聞雑誌文庫)、東京大学情報学環・学際情報学府図書室、昭和館図書室で、『婦女界』『主婦之友』『婦人倶楽部』『キング』『講談倶楽部』『面

白倶楽部』などの大衆的な娯楽雑誌、『中央公論』『改造』などの当時の主な総合雑誌および『大阪朝日新聞』『東京朝日新聞』『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』『讀賣新聞』のような全国紙、さらに『サンデー毎日』『アサヒグラフ』などのグラフ誌の調査を行った。

#### (3) 米国での調査（平成 25 年度）

ニューヨーク公共図書館(New York Public Library)で *New York Daily News*、(*American Daily Mirror*、*New York Evening Graphic*、*Ladies' Home Journal*、*Saturday Evening Post* など大衆向け新聞・雑誌を中心に資料調査を行った。また、ニューヨーク公共図書館・書店・古書店で先行研究の補足調査も行った。

#### (4) 英国での調査（平成 26 年度）

大英図書館(The British Library)および古書店で *Tit Bits*、*Answers to Correspondents*、*Daily Mail*、*Daily Mirror*、*Daily News*、*Daily Express* などの大衆向け新聞・雑誌を中心に資料調査を行った。また、大英図書館・書店・古書店で先行研究の補足調査も行った。

上記のような調査とそれに続く考察により得られた知見は、国内外での学会発表や日本の新聞・ジャーナリズムに関する国際的な共同研究プロジェクト *Journalism and the Japanese Newspaper in Japanese Studies* (Anthony S. Rausch 弘前大学准教授主宰)への参加を通して他の研究者からのフィードバックを得てさらに練り上げ、論文の形にまとめて出版していった。

また、本研究で明らかになった日本の出版文化の大衆化現象の進展に関する知見は、雑誌『會館藝術』の刊行を含む大阪朝日会館の文化活動を分析する共同研究 (Herman Gottschewski 東京大学准教授主宰〔当時〕；現在は申請者・前島志保主宰)での研究活動にも活かされた。

## 4. 研究成果

日英米の図書館・資料館で様々な雑誌・新聞を調査・考察した結果、以下のような成果

を得た。なお、こうした研究成果は国内外の学会で口頭発表されたうえで、既に英文による共著書に収められ出版された。日本でも単著の一部に収められ刊行される予定である。

### 直接的影響関係の希薄さ(もしくは立証の困難さ)

当初の予測に反して、日英米間の定期刊行物出版における直接的な関連性を十分に立証することは難しいことが分かった。たとえば、戦間期の日本において最大の大衆的婦人雑誌であり、当時の新聞・雑誌の編集・営業手法に多大な影響を与えた『主婦之友』の主宰・石川武美は、英国のノースクリフの *Daily Mail*、*Daily Mirror*、米国の *Ladies' Home Journal*、*Saturday Evening Post*、各種写真新聞への強い関心を示しており、また、『婦女界』主宰の都河龍や『婦人倶楽部』を出していた講談社の野間清も似たような関心を持っていたことが彼らの手記からうかがわれる。しかし、実際にこれらの海外の新聞・雑誌が日本の定期刊行物の編集・営業手法にどのように影響を与えたのかという点について直接的影響関係を実証的に示すことは、今回の調査ではできなかった。しかしこのことからかえって当該のテーマに関する理解が深まり、次のような分析結果が導かれた。

### 出版・読書文化の大衆化の世界同時性と「新聞の女性化・雑誌化」

すなわち、この時期は直接・間接の(相互)関与が認められるか否かに関らず、当該各国の定期刊行物において或る程度同じような大衆化傾向が認められ、その世界同時性自体に意味がある、ということが明らかになった。当時の日本の編集者もある程度は英米の状況を把握していたが、日本の大衆的な雑誌の編集者たちは概して外国語が堪能ではなかった。このため、編集上の細かい点についてはかなりの部分独自に手法を開発していったものと考えられる。にもかかわらず、この時期の日英米の定期刊行物の編集・営業手法

には似たような傾向が観察される。すなわち、談話体を駆使した親しみやすい文体、視覚表現の多用、文章・視覚表現における現実再現性への志向、身近な話題の重視、読者参加や他業種との連携の積極的取り入れ、である。

こうした手法は、日本では戦間期に『主婦之友』(1917年創刊)『婦人倶楽部』(1923年創刊)などの大衆的婦人雑誌が積極的に開発・発展させ、他の大衆雑誌のみならず総合雑誌や全国紙をも含む他の媒体へも波及していった。同様に、英国では19世紀末から1920年代にかけて、*Tit Bits* (1881年創刊)や *Answers to Correspondents* (1880年創刊)のような雑誌においてこうした変化への第一歩がまず見られ、ここで試みられた親しみやすい編集手法が新聞 *Daily Mail* (1896年創刊) や写真新聞 *Daily Mirror* に応用されていった。米国でも19世紀末に登場した *New York World* (1883年創刊)、*New York Journal*(1896年創刊) などいわゆる Yellow Press と呼ばれる大衆的な新聞や女性向け雑誌 *Ladies' Home Journal* (1883年創刊)を中心に同様の手法が発展し、20世紀に入り *New York Daily News*(1919年創刊)、*(American) Daily Mirror* (1924年創刊)、*New York Evening Graphic* (1924年) など各種の写真新聞 (Tabloid) によってさらにこの傾向が押し進められていった。

相互の直接的影響関係の有無にかかわらず見られるこのような編集・営業手法上の変化の存在は、こうした傾向は出版・読書文化が大衆化していく中で必然的に現れる現象である、と結論づけることができるであろう。

また、日英米各国においてこの変化が「新聞の雑誌化」「出版文化・読書文化の女性化」「読む新聞・雑誌から見る新聞・雑誌への変化」として認識されていたという点も、非常に興味深い事実として浮かび上がってきた。

#### 視覚表象の用い方・レイアウトの傾向に見られる相違点および前代との関わり

上述のように、世紀転換期から戦間期にか

けての全般的な編集手法・営業手法・読書規範における変化にはほぼ同様の傾向が見られるものの、視覚表象の用い方やレイアウトの傾向にはそれぞれの地域でかなりの違いが認められ、それはそれまでの各地域における出版・読書文化の在り方を反映しているものと考えられることが明らかになった。

たとえば、英米では写真を複数組み合わせる一つの事柄を報道する試みは新聞・雑誌でかなり早くから行われていた。これに対して日本では、新聞への写真の取り入れは多くの場合一つの記事につき一つの写真をあてる形で行われ、組写真の登場は英米に比べるとかなり遅かった。また、写真新聞の広がりもこの時代は英米ほどではなかった。これは、19世紀から写真画像に基づいた精密な木版画を複数組み合わせる報道する習慣があった英米と、錦絵新聞 / 新聞錦絵や事件絵葉書に見られるように多くの場合一つの画像で一つの事件を報道する習慣が続いていた日本の、報道における視覚表象の用い方の歴史的展開の違いに基づいていると考えられる。

また、1920年代以降印刷・製版技術の発達によって文字と視覚表象を自由に組み合わせるレイアウトが可能になると、英米よりも日本の定期刊行物 (特に雑誌) のほうがこの自由度を自在に活用する傾向が強く、そのスタイルは近世の草双紙のものに近いということも、興味深い発見であった。

#### 読書規範と実際の読書形態の乖離および性差の関与における相違点

実際の読書形態と性差の関わりについても、日本の事例は他の二カ国とはかなり異なる傾向を示していたことが明らかになった。前述したように、どの国においても女性向け媒が出版の大衆化現象の中心を担っていたのであるが、そこへの性差もしくは公 / 私 の区分の関り方には地域的差異があった。

たとえば、日本の戦間期においては定期刊行物の大衆化は『主婦之友』などの大衆的婦

人雑誌が牽引していたが、こうした雑誌は新しい編集・営業手法を積極的に取り入れることによって、女性向け媒体を男性が読む行為に対する忌避が規範として存在していたにもかかわらず、男性読者の取り込みに成功し、当時日本で最も発行部数の多い定期刊行物ジャンルとなった。これに対して、英米でも売れ行きのよい女性向け媒体を元に国民的な新聞・雑誌を作ろうとする動きはあったものの、いずれも、男女双方の読者や批評家の抵抗により阻まれていたことが分かった。

ここから、少なくとも 19 世紀末から戦間期においては英米では女性向け媒体を男性が実際に手に取ることに對する禁忌が日本よりも強かったことがうかがわれる。

#### (5) 副次的な成果

さらに、副次的な成果としては、まず、(2) (3)で指摘したような戦間期日本の定期刊行物における編集手法・視覚表象・レイアウトの大衆的な傾向は、当時関西における主要な文化施設であった大阪朝日会館から発行されていた雑誌『會館藝術』においても認められることが確認できた。つまり、上述したような編集上の変化は、一見大衆性とは程遠い媒体にまで及ぶ、非常に影響力のある動きであったことが分かった。

また、戦間期の大衆的な定期刊行物における近代的生活の表象および言説を広告と実用記事（消費文化）に焦点を当てて分析してみた結果、ここでもやはり日英米との間に世界同時的類似性が認められた。しかしながら、戦間期日本における消費文化関連の表象・言説には、欧米を頂点とする階層構造としてそれまでは認識されていた近代性の理解に多少の変更を加えようとする志向性が見出されることが判明するとともに、その限界も分析の結果浮上してきた。

#### (6) 本研究の成果の意義と今後の課題

以上の研究成果は、出版・読書文化の比較研究の第一歩であるとともに、近代日本出版

史研究の基礎となるものであり、さらに、歴史学・社会学など様々な分野における研究の資料上の基盤を提供するものである。

今後は、本研究で明らかになった世紀転換期から戦間期における日英米の出版・読書文化の特色がこの時代特有のものであるのか否かを、その前の時代の状況と対比検討する必要がある（同様の作業の必要性は近代的生活イメージの考察についても言える）。

すなわち、視覚表象の用いられ方やレイアウトの傾向は本当にその前の時代（19 世紀後半）の出版物の流れを汲むものであるのか、談話再現的な文体と写真画像の多用に見られる現実再現性への志向はいつ頃からどのような状況および理念のもとに登場したのか、また、女性向け出版物の男性読者に対する戦間期日本読書文化における寛容性と同時期の英米の読書文化における非寛容性はこの時期特有のものであったのか、あるいは前の時代には別の傾向が各地域で見られるのかなどについて、当時の具体的な出版物と言説を丹念に調査・分析することによって明らかにすることが、今後の課題となろう。

そしてそれは、日英米各国において新聞の大衆化が「雑誌化」「女性化」とみなされていたことが示唆する問題、すなわち、新聞・雑誌という定期刊行物のジャンル区分と性差の関り方を 19 世紀から 20 世紀に渡る長いスパンで考えなおす作業をも含むことになるであろう。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 8 件）

前島志保、「『會館藝術』の定期刊行物としての特徴とその意義—主に 1941 年までを中心に—」（招待講演）シンポジウム「『會館』という文化装置—『會館藝術』と大阪朝日會館」、2015 年 3 月 14 日、東京大学（東京都・目黒区）

Shiho Maeshima, “Notes of Caution on the Use of Modern Japanese Print Media as Source Material: Lessons from Historical Studies of Journalism,” The 26<sup>th</sup> Annual Conference of the Japan Studies Association of Canada (JSAC), October 5, 2013, The University of Saskatchewan (Saskatoon, Canada).

Shiho Maeshima, “Consumerism, the Housewife, and the Modern Girl: Consequences of Interwar Cosmopolitanism in Japanese Popular Magazine Advertisements,” Asian Studies Conference Japan (ASCJ) 2013 Conference, June 30, 2013, J. F. Oberlin University (東京都・町田市).

前島志保、「戦間期日本の婦人雑誌と出版の大衆化現象：婦人雑誌の意義の見直しから比較研究に向けて」、20世紀メディア研究所 第75回研究会、2013年4月27日、早稲田大学（東京都・新宿区）

Shiho Maeshima, “Social Crisis, Nation State, and ‘Home’ in Interwar Japan: Discursive Transitions of ‘Home’ in *Shufu no tomo* (Housewife’s Friend) in the late 1910s and the 1920s,” The Commemorative 25<sup>th</sup> Annual Conference of the Japan Studies Association of Canada (JSAC), October 13, 2012, Carleton University (Ottawa, Canada).

前島志保、「戦間期『主婦之友』における『家庭』と『日本/国家』」、法政大学国際日本学研究所主催・研究アプローチ（1）第2回研究会、2012年9月22日、法政大学（東京都・千代田区）

Shiho Maeshima, “The Dream of a Multicultural Empire: Representation of the ‘Japanese’ in the 1930s Popular-Magazine Photo Stories,” Asian Studies Conference Japan (ASCJ) 2012 Conference, July 1, 2012, Rikkyo University (東京都・豊島区)

Shiho Maeshima, “Adapting Different Visual/Viewing Customs: Development of Photojournalism in Modern Japan,” (シンポジウムにおける招待講演) Reform, Reuse and Recycle: Comparative Literature Perspectives on Adaptation (Second International Symposium on Comparative Literature), June 16, 2012, Kanagawa University (神奈川県・横浜市)

〔図書〕(計4件)

前島志保、『主婦之友』の時代 — 近代日本における出版・読書文化の大衆化と婦人雑誌』（仮題）白水社より刊行予定  
Shiho Maeshima, “Chapter One: New Journalism in Interwar Japan,” Anthony Rausch ed., *Japanese Journalism and the Japanese News Paper: A Supplemental Reader*, Amherst, NY: Teneo Press, 2014, 281 pages (pp. 3 – 29).

Shiho Maeshima, “Constructed/Constructing Bodies in the Age of the New Middle Class: Representations of Modern Everyday Life Style in the Japanese Interwar Women’s Magazine,” *Resilient Japan: Papers Presented at the 24<sup>th</sup> Annual Conference of the Japan Studies Association of Canada*, Japan Conference Association of Canada, 2014, 295 pages (pp.110 – 139).

Shiho Maeshima, “Print Culture and Gender: Toward a Comparative Study of Modern Print Media,” Sung-Won Cho ed., *Expanding the Frontiers of Comparative Literature Vol.2.: Toward an Age of Tolerance*, Seoul: Chung-Ang University Press, 2013, 466 pages (pp. 354 – 363).

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

前島 志保 (MAESHIMA Shiho)  
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授  
研究者番号：10535173